

保育随想

★言葉にならなくても・・・

通勤の車の、フロントガラスに差し込む光の角度が低くなり、まぶしさを感じてサンバイザーが必要になると、“秋も深まりつつあるのだなあ”と思いながら園に向かっています。子ども達はどんぐりや银杏の葉っぱを両手いっぱい集め、職員室に「袋ください。」と、訪ねてくれます。ある日、森の中に置き去りにされた砂場玩具のフライパンがあり、拾ってみると、その中には殻を剥かれたどんぐりの実がたくさん！この場所で、どんな遊びの展開がなされていたのでしょうか。そんなことに思いを馳せていると、子ども達が季節や自然を生活の中に取り入れてくれている喜びを感じます。何人かで、たくさんおしゃべりしながら、皮を剥いていたのかな？それとも、一人で黙々と探求しながら剥いていたのかな？等々。私はどちらかというと後者に近く、大変な人見知りで内弁慶な子どもでした。この仕事に就いておりますと、意外！と言われることが多くありますが、成長とともに、生きていく術として、コミュニケーション術を学んでいたような気がします。

コミュニケーションというと、言葉でのやりとりというイメージが強くなりますが、発語が難しかったり、自ら相手に働きかけることが苦手など、人それぞれですね。子ども達も同じです。挨拶もそのひとつで、元気に「おはよう！」「さようなら！」が言える子どももいれば、顔をみて微笑み返しをくれる子ども、タッチだけで挨拶を交わす子どももいます。それもコミュニケーションのひとつです。言いたいことがあっても、なかなか言葉で表現できない、わかっているけど恥ずかしくて言葉にならない。そんな時は表情からその子どもの思いを察し、気持ちを探り、共有していくようにしています。廊下や外で出会ったとき目が合い、何か言いたげな子どもにはにっこりと微笑み返し、または、頭に手をおいてうなずくなどのモーションをかけるように心がけています。

これは、私自身の幼い頃の心象風景として、ずっと心に残っていることが要因となっているのです。先に示したように、極度の人見知りだった私の幼少期、親戚のおばさんの家に泊まりに行くことが毎夏の事だったのですが、その親戚の家は子どもが4人いる家で、しかも決して裕福とは言えない家でした。ですので、そのおばさんはいつも忙しそうで、子どもの私から見ても、ゆっくりと座っていることがなかったくらいでした。そんな中で、私は何を言うでもなく、何をすることもなく、でもそのおばさんと目が合うと、いつでも満面の笑みくれたのです。存在を認めてもらえたような気がしました。だから大好きな人でした。

先日私が退勤する際に、玄関で出会った男の子に「さようなら。」と言った時、「戸田先生、一人で帰るの？一人で大丈夫？」という返しをもらいました。さようならの言外にある優しさや思いやりがそのまま言葉になったのでしょうか。コミュニケーションとは、気持ちを伝えるための手段なのですね。多くを語らずとも、生活の中で学んでいくのでしょうか。

忙しい毎日、お子さんと目が合った時、にっこりと微笑んでうなずいてみませんか？

保育随想

★ イメージの世界

園庭のいちょうやけやきの葉が真っ黄色に色づき、落ち葉のじゅうたんの中で、無心に葉っぱを拾い集めたり、葉っぱをブーケのような形にして楽しんだり、子ども達は晩秋から初冬にかけての自然界からの贈り物を思う存分受け取っています。

大人の世界でよく使われる言葉として『イメージを膨らませる』があります。いろいろな事象を見聞して、自身の経験と重ね合わせ、そこから新たな世界観を想像していく…といったところでしょうか？自身の心や頭の中で膨らませたものを次にアウトプットできるかどうかという、そこに難しさを感じたりするのは私だけでしょうか？アウトプットの表現方法は人それぞれで、卓上でできてしまうこともあれば、全身を使って表現する、あるいは感覚で動くということもあるかもしれませんね。

では子ども達の世界ではどうでしょうか。まだまだ人生経験が少ない子ども達に『イメージを膨らませる』ということは少しハードルが高いように思っていました。先日ある年少組の男児が「先生、見て！クジラを描いたよ！」と、園庭に枝で描いたクジラの絵を得意そうに見せてくれたのです。それを担任に伝えると、その男児はお部屋の画用紙の上では、手が止まってしまって何かを描くということに少し抵抗があるという話でした。思い返せば、あまり絵を描くことが得意ではなかった私が、道路や神社の土の上などに石や枝等で大きく描くときには何の抵抗もなかったと記憶しています。小さなキャンバスより大きなキャンバスに全身を使って表現することで解き放たれた感じがするのかもしれません。そこには「正解」もないです。先の方の男児はクジラは大きいというイメージがあったのかもしれませんが。それをそのまま表現できたことが嬉しかったのでしょう。子ども達の生活の中で、子ども達なりのイメージがあり、それをどう表現したり膨らませたりするのは、まさに生活そのものに影響されるのではないかと思います。

子ども達を取り巻く環境はもとより、家族や先生や友達の言動そのものも、子ども達の世界観に大きく影響していくことだと思います。イメージとは逆の『現実』に対しては、コメントしやすいものですが、それぞれが持っているイメージを共有することは、時に難しく感じます。その分共有できた時の喜びは倍増します。このすずらん幼稚園で、子ども達がどんなイメージの世界を作り上げていくのかが、私はとても楽しみで、喜びでもあります。

一週間後には発表会があります。各学年でそれぞれの発達に応じた発表となりますが、まさに担任と子ども達が、いかにイメージの共有ができるか、それをいかに舞台上で表現できるか！紆余曲折…悩みや苦悩…先生達も一筋縄ではいきません。『イメージの世界の共有』というハードルを乗り越えて、必ずと言っていいほど生じる喜び（感動に近い）をイメージしながら、皆がそこに向かっています。皆が幸せな気持ちになればいいなと思います。

幸せな気持ちになれる日々の生活を、イメージしてみたいかながでしよう

保育随想

★ 幸せって・・・

園庭の落葉樹たちがすっかり裸になり、木枯らしに舞い踊る葉っぱや寒波襲来！のニュースなどから「冬本番」を実感する季節となりました。

冬は寒いけれど、心の中はあったかい・・・そんな日々を過ごせたら素敵ですね。発表会、クリスマス会、お餅つき会などの行事はまさに寒い冬に心温まるエピソードがたくさん詰まっています。周りの人たちに認めてもらえた発表会、サンタさんが幼稚園に来てくれた高揚感、皆で一緒にもちつきをしてその場で食べられる「おいしい！」の気持ち。どれをとっても温かい！その温かさを共有できる誰かが傍にいてくれるともっと温かい！その温かさこそが「幸せ」ではないかと思うのです。

幸せをつかみとるとという言葉が耳にすることがあります。実際につかみとった方も周囲にはいらっしやることでしょう。私は少し違って、常日頃「幸せ」とは、「感じるもの」と思っています。それが何によってもたらされるかは、その時々で変わるかもしれません。美味しいものを口にした時、大好きな物に囲まれた時、素晴らしい景色に出会えた時、感動する映画や本に触れた時等々。それは長期的な時間の場合もあれば、瞬間の場合もあります。いずれにしても「つかむ」というよりは「感じる」という感覚に近いです。

先日卒園生の保護者の方とお話する機会があり、とても嬉しいお言葉をいただきました。6年生となったそのお子さんのことについて、「学校の先生が大好きで毎日楽しく登校できています。幼稚園の3年間で先生のごことが大好きという体験を通じて、先生という存在に対する愛情をそのまま引き継いで学校生活を送れているのだと思います。」とおっしゃっていました。お子さんが家族以外の誰かを信頼する、その最初の誰かとの出会いが、保育園や幼稚園であることで、私たちはとても重要な責務を担っています。でもそれは決して重荷ではなく、「よろこび」となり返ってくるものです。そこに幸せを感じながらこの仕事をさせてもらっています。

「辛い(つらい)なあ」と感じる時があった時、何かひとつだけでも生活にプラスしてみてはいかがでしょうか？辛い漢字の上部に横線を一本入れると「幸」という漢字になりますよ。生活にひとつプラスされたものが、辛いに足した横線一本と同じであれば、きっと幸せを感じられる！何かと忙しく、慌ただしい年の瀬ではありますが、仕事、家事、育児に頑張っていっぱいやる皆さんが、ご自分やご家族にプラスワンの幸せ見つけができることを願っています。

2025年もあと少し。新しい年は午年ですね。馬は「跳ねる・駆ける・達成する」がキーワードとなるそうです。新しい年に思いを馳せ、ご家族でゆったりと穏やかな新年をお過ごしください。そして、新学期も元気にお会いしましょう。さらに、一緒に「幸せ」を感じられる生活空間を創造していきましょう！

保育随想

★ 「三つの容」

暦の上では「大寒」を終え、来る二月の「節分」を経て「立春」を迎えようとしています。とはいえ、まだまだ冬将軍が勢力を保っている日々ですが、菜の花や梅の便りを見聞きすることで、春がちょっとずつ近づいていることに嬉しさを感じるこの頃です。

幼稚園では今、全学年を通じて「郵便屋さんごっこ」が盛んです。実際のサイズの二回りほど大きくしたはがきを各クラスに用意して、子ども達は手紙を送りたいお友達や先生にお手紙を書き、学年ごとの郵便ポストに投函します。各クラスの郵便屋さんがクラスごとに設置された郵便受けに配達！文字が書けることを目的とした活動ではなく、文字に【興味】を持つことが主なねらいです。職員室にも郵便受けが用意されています。嬉しいことに私のところにもお手紙が届きます。毎年必ず“あるある”なのですが、私を「とら先生」だと思っている子どもからのお手紙は当然宛名が「とら先生へ」となっています。微笑ましくて、いつもくすっと笑ってしまいます。

現在大学二年生になっている卒園生が年長組の時、文字が読めるようになったからなのでしょうか。私の履いている上履きに「とだ」と書いてあるのを見て、大発見かのように「え??とら先生って、とだって名前だったの?」と言われた面白エピソードがあります。子ども達が(あるいは大人も)何かちょっとしたミスや言い間違いがあった場合、すぐに訂正するのは簡単なことです。でも、その事よりもその子の伝えたいことを聞き入れることの方が大事だと思うのです。まずは、受け入れ【受容】です。そして、それを許す・認める・共有する【許容】。最後まで見届け、包み込む【包容】という三つの容を心掛けたいものだと、自分を戒めています。そんな風に思っていた矢先、通勤の車の中で聴いていたラジオ番組のコーナーで、ドキッとするコメント(言葉)がありました。「人には、まちがえる権利がある」と。失言やミスがあるとすぐに糾弾されてしまう世の中、チャットAIなどですぐに正解が見つけれられる世の中に対する啓発みたいな言葉なのかもしれませんが、もっと柔らかい見方をすれば、子ども達は間違いの中から正解を見つけていくものだとして、受け取れました。間違えても、発達過程の中で自分で間違いを訂正できて、その後の生活に活かされるという繰り返しののだと思います。

大人だって間違えますよね。それを受け入れてもらい、許してもらい、大丈夫だよって包み込んでもらえたら、自分を嫌いにならずにすみますね。お互い様ですもの。

先に記した大学二年生の卒園生と「よかったあ!気づいてくれたんだ!」という会話を経て、笑い合い、彼はその後「とだ先生」と呼んでくれるようになりました。めでたしめでたしです。

保育随想

★ 春に想う

日本の四季「春夏秋冬」の一番最初の季節である「春」。なんとなく閉ざされていた世界の扉が優しく開かれて、丸まっていた背中もピンと伸びる・・・そんな感じがしませんか？大好きな季節です。草木が芽吹き、冬ごもりをしていた虫たちが地上に顔を出し、活動を始めます。毎年ながら、自然の摂理に驚き、感動をもらい、「生きていく」実感を得られる季節です。一方、半月後には年長組の子ども達が旅立ちます。それに伴い寂しさも感じずにはられません。この保育だよりも今年度最終号を迎えました。故森田博前園長先生からの引継ぎとして、9月末発行の回から、私の思いを文字に乗せ、皆さんにお届けできたことをとても嬉しく有難く受け止めております。思い起こせば、4月の頃、新入や進級で子ども達はもとより、お家の方々もそれぞれにいろいろな思いを持って過ごされていたのではないのでしょうか？森田博先生の4月の保育だよりを読み返してみますと、「やってみよう！」の気持ちで動き出した先には心が晴れる世界があると記されております。いかがでしょうか？やってみようの気持ちからの心晴れやかな世界は創造できましたか？ここ庄和すずらん幼稚園で培われたやってみよう！の主体性、できた時の達成感はこのからの生活に必ずや潤いを持たせてくれると信じて止みません。

先日、園生活がカウントダウンに入った年長組の各部屋にお邪魔して、昼食をともにしました。それぞれのクラスの個性あふれる雰囲気の中で大変楽しい時間を過ごしました。とても積極的に話しかけてくれる子どもの陰で、アイコンタクトの中に、「話しかけてほしいな・・・」「こっちに来てくれないかな？」などの気持ちが見え隠れ。そんな中、私が職員室へ戻ろうとした際にとっても小さく折りたたんだお手紙を手渡してくれた女の子がいました。「とらせんせいへ」(笑)。中身はとらせんせいだいすき！でした。スタンプが押されており、明らかに家で書いたものです。小さな手紙に小さな文字ですが、気持ちがとても大きく伝わってきて、私の心は一気に「春色」に染まりました。

三日寒い日が続いた後に、四日温かい日が続くという三寒四温のこの時期、気候だけではなく、人の心も同じかもしれません。いつも同じ状態の心情を保つことは難しい事です。落ち込む日が続いたとしても、そのあとに前を向ける日が続いていったら、「春」はやってきます。そのペースは人それぞれ。冬ごもりが少し長くなっても、ちょっとずつ「春」に向かっていきましょう！

そして本格的な春、4月には年長組は小学校、年少・年中組は進級と、新たなステージが待っています。そのステージ上で子ども達にまた「やってみよう！」の気持ちが芽生え、素敵な花々が咲くことを心より願っています。